

鳥取県鳥取市（国内 22 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 4 年 12 月 1 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は池に隣接する平地に位置し、農場周辺には稲刈り後の水田や草地在り存在する。
- ② 当該農場に隣接する池には、農場に近い側でカルガモ 36 羽、ホシハジロ 24 羽などのカモ類 72 羽を確認したほか、池全体でスズガモ 4,876 羽、ホシハジロ 896 羽、ヒドリガモ 774 羽、マガモ 687 羽など合計 8,163 羽のカモ類を確認した。また、農場から 900m に位置する調整池では、カルガモ 57 羽、ヒドリガモ 11 羽など合計 77 羽のカモ類を確認した。
- ③ 当該農場はセミウインドウレス鶏舎 6 棟からなり、全棟が入口側の内部通路で連結していた。各鶏舎は背中合わせの直立 4 段 2 列ケージで、発生時は全ての鶏舎で採卵鶏が飼養されていた。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 230 日齢）の通報前日までの 21 日間平均死亡羽数は 3.6 羽/日であったところ、11 月 29 日夜に 4 列あるケージのうち最も手前の 1 列の上から 2 段目、手前から 5 つ目のケージから奥側に向けてそれぞれ 4 羽、1 羽、1 羽の死亡が認められ、翌 30 日朝に更に隣接するケージで死亡数の増加が認められたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。この際、採餌、飲水量及び産卵数に異状は認められなかったとのこと。
- ② 通報後も、次第に死亡する鶏や活力の低い鶏が増えていったとのこと。
- ③ 調査時は、通報があったケージとその横方向に隣接するケージやその上下のケージに加え、その背面のケージで多くの死亡鶏が認められたほか、発生鶏舎全体で、最上段及びその下段のケージを中心に多くのケージで 1 から数羽の死亡鶏が認められた。さらに、発生鶏舎に隣接する 1 鶏舎においても、最上段及びその下段を中心に、鶏舎全体の多くのケージで 1 から数羽の死亡鶏が認められた。また、通報があったケージの周辺で軟卵を認めた。

3 管理人及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場の作業従事者は 7 名で、うち 6 名が死亡鶏の見回り、集卵等の鶏舎内での飼養管理に従事し、残り 1 名は堆肥作業に従事していたとのこと。
- ② 6 名の飼養管理者のうち 3 名が 2 鶏舎ずつ担当しており、その他の従業員が全体的な業務、休みの従業員の補填、死亡鶏の回収等を行うとのこと。死亡鶏が認められた 2 鶏舎は同じ担当者であったとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の境界には柵が設置され、2 か所ある農場出入口は使用時以外は閉鎖されていたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、飼料運搬車、集卵車、従業員の車両等が衛生管理区域に入る際には、農場内の消石灰帯を通過した後、動力噴霧器で車両消毒を行っていたとのこと。さらに、飼料運搬車、集卵車等の外来車両の運転手については、衛生管理区域専用の長靴に履き替え、手指消毒を行うとともに、車両のフロアマットを当該農場専用のものに交換していたとのこと。
- ③ 従業員は、集卵室の前室で衛生管理区域専用作業着及びサンダル、軍手を着用する

とのこと。鶏舎に入る際には、鶏舎前室で鶏舎専用の長靴履き替え、上着及び手袋を着用しているとのこと。なお、6つの鶏舎は屋内の通路で連結していることから、鶏舎ごとの靴の履替えは行っていなかったが、各鶏舎の区画に入る際には、靴の踏込み消毒（逆性石けん、通常2～3日で交換又は汚れれば随時）と手指消毒を行っていたとのこと。

- ④ 鶏舎後面の換気扇により排気し、反対面のクーリングパッドから吸気する強制換気を行っていた。換気扇の外側には換気扇停止時に自動で閉鎖するシャッターが設置されていた。天井部及び壁面の開口部はロールカーテンで閉鎖されており、電気設備の点検等で停電する場合以外は開けていないとのこと。なお、最近1か月にそうした機会はなかったとのこと。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は鶏舎内の洗浄・消毒を行い、その後の空舎期間は14日程度設けていたとのこと。直近の導入は11月17日で、当該群には調査時に異状は認められなかった。
- ⑥ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌できる構造となっていた。また、飼料添加物は、飼料タンクに直接投入しているとのこと。
- ⑦ 飼養鶏への給与水及び洗浄水には、塩素消毒した井戸水を使用しており、給与水はラインを通じて自動給水を行っていたとのこと。
- ⑧ 集卵ベルトが鶏舎外に出る開口部は高所に設置されていたが、ベルトの下部に4cm程度の隙間があった。除糞ベルトが鶏舎外を通る部分にも数cmの隙間や破損があり、小型野生動物が侵入できると考えられた。また、除糞ベルトの鶏舎外への開口部は、除糞作業時以外はパネルで閉鎖されていたとのこと。
- ⑨ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の飼養管理時などに回収し、鶏舎ごとの容器に入れて運び、農場内の堆肥処理施設で堆肥に混入していたとのこと。
- ⑩ 管理獣医師はいるものの、最近の訪問はなかったとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、鶏舎外ではネコ、カラスを見かけることがあり、ネコはまれに鶏舎内にいることがあるとのこと。
- ② 鶏舎内のネズミ対策としては、殺鼠剤の散布と粘着シートの設置をしているが、ネズミはまれにしかかからないとのこと。
- ③ 調査時には、堆肥舎にネコ数匹を確認したほか、鶏舎内でもネコを確認したが、これは防疫作業時に侵入した可能性も考えられた。また、鶏舎内において、粘着シートに捕獲されたネズミを確認した。発生鶏舎では、除糞ベルトの鶏舎側開口部を閉鎖するパネル上に、小型哺乳動物の足跡が多数認められた。農場周辺ではハシブトガラス及びトビを確認した。

(以上)